

ラジオを聴くフランスのマグレブの母たち（とその娘たち） ヤミナ・ベンギギの作品から

石川清子

1. 序

アルジェリア人の両親をもちフランスで生まれたヤミナ・ベンギギ監督のドキュメンタリー映画『移民の記憶 —— マグレブの遺産』（1997年）は、日本でも2007年に紹介された。この映画でベンギギは、フランス国内における北アフリカからの移住者とその次世代以降の、これまで可視化されず散在していた歴史を、フランスではじめて集合的に編んだと言ってよい。本作品はマグレブ移民の歴史を辿る際の基本的参照資料になっている。公開されてから既に20年以上が経っていることに今さらながら驚くが、本年（2018年）ロシアで開催されたサッカーワールドカップでフランスが二度目の優勝を果たし、多民族・多文化社会フランスを表す標語「ブラック、ブラン、ブル（Black-Blanc-Beur）」¹が喧伝された1998年の一回目の優勝時と比較してみれば、外国にルーツをもつ人々がフランスを構成していることが、今や当然のこととして受けとめられている。当時の国民戦線党首ジャン＝マリー・ルペンが「移民は国歌ラ・マルセイエーズを知らないので歌えない」と、自国の民族的混成チームを揶揄し、移民排斥の主張を強調したのが1998年だった。

フランスは古くからの移民大国であるが、移民は「記憶の非・場」non-lieu de mémoire²に排除され、フランス史の欄外に置かれていた³。「移民の記憶」の総合的な記録化の必要性は、1980年代から歴史家バンジャマン・ストラヤやジェラルド・ノワリエルの移民史研究と相まって議論されるようになった。その本格的なアーカイブ化、そして、それを

¹ フランスの三色旗、青白赤にちなんで、ブラック（黒人）、ブラン（フランス語で白人）、ブル（フランス語の俗語で「アラブ」を逆さにしてアラブ人）と、共和国の構成エスニシティを並べた。

² Noiriel [1988], 20.

³ 「記憶の非・場」という表現は、ピエール・ノラの壮大かつ画期的な歴史学的編著『記憶の場』*Les lieux de mémoire*, Gallimard, 1984-1992を示唆している。ノラは、集合的記憶を表象する場の分析をとおしてフランス国民意識を検証することを全7巻の本書で試みたが、ノワリエルは、移民の存在がノラの視点から欠落していることを反語的に示している。

具現した施設の一つにパリ市ヴァンセンヌの森にある国立移民史博物館があげられる⁴。メディアジャーナリズムの論客、カトリーヌ・アンブロは、フランス移民史の象徴的博物館オープンまでの小史をたどり、1998年のサッカーワールドカップ優勝があって、初めてフランスは移民の記憶化に本腰を入れたと断言し、1997年のベンギギ映画はこの風潮を先取りし後押ししたと述べている⁵。

アンブロは『移民の記憶』公開以来、熱心にベンギギ作品とその反響を追いかけている⁶。フランスの20世紀移民史において紛れもなく大きな貢献をしたヤミナ・ベンギギは、以上の意味で、まず何よりもアクチュアルな歴史的事象に強く反応するシネアスト、ジャーナリストと言ってよい。その初期三部作、『イスラームの女たち』『移民の記憶』『インシャーアッラー日曜日』（以下『インシャーアッラー』）⁷について、三作いずれも書籍としてテキスト版が刊行され映画とは別の構成をとっていること、そして特に『インシャーアッラー』がフィクションであり、テキスト版は小説として読めることから、筆者は以前、ベンギギ作品を映画とは別個の独立した文学として読もうと試みた⁸。本稿ではその延長として、「ジャーナリスト」ヤミナ・ベンギギの側面に注目し、移民とメディア、とりわけ音楽とラジオに焦点を当て、フランスにおけるマグレブ移民第一世代の女性たちと音楽の関わりを考察する。

マグレブ移民第二世代にとって、「非・場」に排除された父母たちの記憶を可視化することは、彼ら、彼女らの多くが生まれ育ったフランスで、自分たちの場を確保し、固有

⁴ 長い準備期間を経て、国立移民史博物館（Le musée de l'histoire de l'immigration）は、1931年に開催された植民地博覧会のメインバビリオン、ポルト・ドレ宮に2007年、移民に対して強硬な姿勢をとったサルコジ大統領下で、国立移民史シテ（La Cité nationale de l'immigration）として、博物館より格下の名称で開館した。2014年12月、オランド大統領下で現在の名称に改められた。その使命は「フランスにおける19世紀以降の移民の歴史に関する資料等を収集、保管、展示及び公開すること、並びに、これにより、移民のフランス社会への統合の歩みについて理解を深め、フランスにおける移民に対する見方、考え方を変えていくこと」である（Décret n° 2006-1388 du 16 novembre 2006 relatif à l'Etablissement public du palais de la porte Dorée. Article 2より；webサイト Légisfrance, <https://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do?cidTexte=JORFTEXT000000272458> 2018年8月7日閲覧）

⁵ Humblot 2002.

⁶ Humblot 1999a, 1999b, 2002, 2003.

⁷ 「父たち」「母たち」「子どもたち」と題されたそれぞれ52分ずつの来歴をたどった三部からなる『移民の記憶』は映画監督ベンギギの2作目の映画であり、第一作の『イスラームの女たち』、そしてその後続く『インシャーアッラー、日曜日』と、ベンギギ自身の母にあたるマグレブ移民第一世代の女性をドキュメンタリー、そしてフィクションと異なる手法で同じ対象を追求してきた、統一性をもった三部作と言ってよい。

⁸ 石川 2017.

の歴史／物語を切り拓いていくために必要な作業だった。離郷した母たちが聴いた歌謡曲をとおして、母たちの郷へのまなざし、そして受入国という異郷での奮闘を娘世代のベンギギは映画として表現するが、それはまたベンギギ自身のアイデンティティ構築のさまでもある。

II. ジャーナリスト、ヤミナ・ベンギギ

「ジャーナリスト」ベンギギは何よりもまず政治的人間である。個人的に送ってもらった日本でのベンギギ紹介記事用メッセージは、次のように結ばれている。「アーティストにとっていかなる表現方法であれ、あらゆる芸術的行為は政治的行為です。これを普遍的に自覚することが、アーティストの社会問題への参加の核心をなしています」⁹。ベンギギの表現行為は社会問題への参加があってこそ成立し、その活動が結果として「政治的」になる。2017年3月、パリでベンギギと個人的に談話した際に、『移民の記憶』が当時フランス社会で大きな話題になったことに及び、フランソワーズ・ジルーからの称賛が一番うれしかったと話していた。トルコ系ユダヤ人移民の両親からスイスで生まれ、ジャーナリズム、映画のシナリオライターとして活躍したジルーは、1946年から1953年まで、女性月刊誌『エル』 *ELLE* の編集長として采配をふるい、1953年、週刊誌『エクスプレス』 *L'Express* を当時のパートナー、ジャン＝ジャック・セルヴァン＝シュレパールと創刊した。ジスカールデスタン政権下では閣外相、文化大臣の要職を務めた。ジルーと言えば、仏女性ジャーナリストの草分け的存在であり、その経歴は、オランダ政権下で閣外相職にあったベンギギと共通するところがある¹⁰。ベンギギにとっては目指すべき先達であろう。ジャーナリスト的な活動が、結果的に政治に繋がることが表現者としての目的でもあるのだ。

メディアを媒介として、時事的問題を広く世間に知らしめるのがジャーナリストの活動であるなら、エリア・カザン『アメリカ、アメリカ』¹¹によって映画の持つ力に魅了され、映画という表現手段を選びとったベンギギは¹²、映像作品を軸に、種々のメディア

⁹ Benguigui 2017.

¹⁰ 2008年5月から2012年6月まで社会党ドラノエ、パリ市長の助役（人権擁護と差別に反する闘い担当）、2012年6月から2014年3月までオランダ政権下で外務大臣付フランス語圏担当大臣を務めた。

¹¹ Elia Kazan, *America, America*, 1963. カザン自身の体験を重ねた、トルコからアメリカ合衆国への移民を夢みるギリシャ人青年の物語。

¹² ベンギギ 2006, 35.

を存分に駆使している。イスラーム圏の女性のドキュメンタリーを手始めとして、フランスのマグレブ移民の歴史を包括的にたどった初期三部作は、いずれも映画とは独立した書籍版がある。意識的にベンギギ作品全体を眺めてみると、その多くが——代表作『移民の記憶』がそうであるように——テレビ放映された、テレビ番組用のドキュメンタリーであることに気づく。市販されている DVD 版の多くには、ベンギギのインタビューや監督自らによる作品解説がふんだんに盛り込まれている。『移民の記憶』については、上映会のあとに必ず討論の場をもうけ、マグレブにルーツをもつ、これまで沈黙していた多くの人々が言葉を発する機会を作り、「討論の場をもつため」に映画を撮ってきたとも表明している¹³。戦略的に作品を世に送り出し、蜘蛛の巣状と言おうか、網の目状と言おうか、一作品から幾重にもメッセージが発信され、作品と作品が繋がりあい反響しあうネットワークを作っている。そのネットワークから浮き上がる作家像は「マグレブにルーツをもつ移民二世であるフランス人女性」であり、ベンギギ自らが確立しようとするアイデンティティであろう。

第一作目のドキュメンタリー映画『イスラームの女たち』の手法——多くのドキュメンタリーにつきもののナレーションはなく、当事者の証言とインタビュー、報道・記録映像、時代と関連する音楽（主に当時流行した歌謡曲）を丁寧にモンタージュしていくやり方——は、ベンギギ作品の基本的編集方法である。これら事実の断片を繋げあわせ、一コマ一コマのエピソードを編集して人々の生きた大きな流れを作っていく作業について、「私はいつも、どれとどれを編みつなぐか考えて、長いフィルムを作るのに没頭している」とベンギギは話していた。

III. 流行歌 —— 祖国とつながる音楽

「映画は万人に共通する普遍的言語」¹⁴と表現者としての立場を各所で表明するベンギギはまた、映画と同じくらい普遍的言語である「音楽」、とりわけポピュラー音楽を意識的に援用する。事実、『移民の記憶』では、移民一世二世が聴いた音楽をふんだんに使用し、それが映画の魅力になっている。音楽は読み書きを知らない者の情報源であり、記憶の貯蔵庫である。親世代の聴いた歌——主にアラビア語、ベルベル語の歌——は、たとえそれらが自分たちの好みではなくても、自然に子世代も耳にしている。家庭では、

¹³ Benguigui 2017.

¹⁴ Benguigui 2017.

とりわけラジオから歌が流れてきた¹⁵。音楽をとおして、父母たちは祖国とつながり、子世代は無意識であれ親の伝統を継承していく。

「映画制作はマグレブ移民の『音楽的記憶』をたどる旅でもありました。音楽は彼らの声そのもの、音楽の断片で故郷の追憶に浸り、辛い日常を耐える力を得たのです」¹⁶とベンギギが表明するように、音楽はまた、時代を掘り起こすための貴重な資料である。語る人の証言や回想に関連する場面に音楽が流れ、メッセージやコノテーションが生じ、映像との一体感を生み出している。『移民の記憶』ではバックミュージックとして流れる父、母、子の各三部の音楽は、当事者たちの境遇、時間のずれのせいで、三者三様に異なった。それぞれが異なる経験と物語をもっているように、移民一世の男たち女たち、子どもたちは異なる音楽体験をしている。フランスへのマグレブ移民は一括りで語れない。単身で渡仏し男たちだけで暮らした父たちと、夫に合流すべく海をわたった母たち、つまり夫と妻では生活体験は別のものである。

1. ダリダとマグレブ

映画全編を象徴する望郷の歌として、ダリダ「美しい、私のくによ」Helwa Ya Baladiが使われていることは既に別の機会に述べた¹⁷。後のベンギギのドラマ『アイシャ』*Aïcha*でも登場するフランス歌謡界のこの伝説的アイコンは、ベンギギ自身の青春を伴走して

¹⁵ 在仏のマグレブ出身者が、どのように故郷の歌を聞いたか。フランスでのアラビア語、ベルベル語ラジオ放送、SPレコード中心のレコード販売、移民労働者として渡仏した歌手、フランスに活路を見出したマグレブ出身歌手、アラブ・ベルベル歌謡キャバレー経営の歴史など、アルジェリア人を中心とする在仏マグレブ人の音楽受容の研究は、2000年以降、精力的になされている。アルジェリアでは既に1999年にMokhtariが書籍として総括している。Daoudi et Miliani 1997及び2002は先駆的、総合的なマグレブ移民音楽史を提供し、El Yazami et al 2009中のDerderian, Scagnetti, Yahiの各論などに引き継がれる。2009年はフランスの移民研究雑誌 *Ecart d'identité* がマグレブ移民音楽について特別号を刊行している。Belbahri はリヨン周辺の特性を論じる。いずれも、国家的事業としての国立移民史博物館（前身は国立移民史シテ）開館が、当該研究の契機となるように思われる。Rachid Taha は移民第二世代のアーティストとして、親世代の歌謡曲をアレンジしたアルバム *Diwan* を出した (Taha 1998)。二世代を結ぶ音楽的証言として興味深い。Tahaのように、90年代に、子世代が親世代の音楽的遺産を発見し、再編して世に送り出す現象が現れた。マグレブ移民音楽の「再発見」には、子世代の記憶の伝承作業に拠るところも多い。Mogniss論文は、90年代、子世代が親世代の「望郷の歌」カバーとして、Tahaの他に、Orchestre National de Barbès, Amazigh Katebらあげる (Mogniss H. 2008)。また、Yahiは男性歌手たちの影にかくれて、これまで論じられることのなかったマグレブ出身女性歌手の存在に光を当てる。Yahiの研究は、マグレブ移民のジェンダー的側面をつねに意識したもので、従来のマグレブ移民史を補完すると同時に修正も示唆している。

¹⁶ ベンギギ 2006, 33.

¹⁷ 石川 2017.

きた歌手でもあり、何よりエジプト生まれのイタリア人でフランスに帰化という来歴が、祖国を離れ異国の地に生きるフランスのマグレブの人々と大きく重なる。ダリダは世界的歌手であり、アラブ圏でも圧倒的な人気をほこった。マグレブとダリダの繋がりは意外に深い。そして、それゆえ矛盾も然り。フランスにおけるアラブ系ポピュラー文化を論じたデイヴィッド・マクマレーは、ダリダのアラブ圏での活躍を次のように概観している。

ダリダは 1956 年のデビュー間もなく、1958 年、1959 年と独立前のアルジェリアでコンサートを行っている。アルジェリア戦争時は、フランス軍の最主要戦力だった落下傘部隊用ポスターのモデルでもあった。と同時に一方では、当時のベン・ベラ大統領がファンだったため、独立後のアルジェリアで初めて歌ったフランスの歌手がダリダだという。1965 年 11 月 14 日、アルジェ、バーブ・エル・ウェド地区のマジェスティック劇場でアラビア語の歌 4 曲を含めて歌った。1984 年にもアルジェで再びコンサートを行なっている。1966 年にはモロッコ、カサブランカでコンサート。この時、祝事場で歌われるヘブライ語の代表的民謡「ハバナギラ」Hava Naguila をヘブライ語とフランス語で歌っている。イスラエルでもコンサート。しかし、この「規範破り」のために、一時アラブ諸国から放送拒否をされている¹⁸。それでも、アラブ - イスラエルの対立を越え、広く地中海諸国で愛された歌手であった。ベンギギはダリダの「美しい、私のおかげ」を、異国で暮らすマグレブの女たちの祖国を想う歌として第一にあげる。

2. 父たちのエル・ハラシ、子どもたちのライ

『移民の記憶』は、マグレブ移民が聴いた音楽のアーカイブにもなっていて、全篇を流れる多くの曲から 15 曲を選んだコンピレーション CD も出ている¹⁹。各部から以下のようにピックアップされている。

第一部「父たち」

1. Dahmane El Harachi (ダフマン・エル・ハラシ) : Kiefeche Rah Kiefeche A Tbedel
2. Dahmane El Harachi (ダフマン・エル・ハラシ) : Ya Rayah

¹⁸ McMurray 30-31.

¹⁹ *Mémoires d'immigrés* [CD]1998.

3. Sliman Azem (スリマン・アゼム) : Thoura - Jarvagh Koulchi

第二部「母たち」

4. Idir (イディール) : Ayrib
5. Malika Dom Ran (マリカ・ドム・ラン) : Asaru
6. Slimane Azem (スリマン・アゼム) : Ayadhou Goual
7. Enrico Macias (エンリコ・マシアス) : Je n'ai pas oublié
8. Idir (イディール) : A Vava Inouva
9. Malika Dom Ran (マリカ・ドム・ラン) : Taawint Igenni
10. Cheb Mami (シェブ・マミ) : Douni El Bladi
11. Dalida (ダリダ) : Helwa Ya Baladi

第三部「子どもたち」

12. Rachid Taha (ラシッド・タハ) : Zaâma
13. Cheb Hasni (シェブ・ハスニ) : Je vis encore
14. Cheb Mami (シェブ・マミ) : Haoulou
15. Rachid Taha (ラシッド・タハ) : Voilà Voilà

このCDにはベンギギ自身の短いコメントも添えられている。

『移民の記憶』の撮影開始からすぐ、発言者の言葉はあまりにも重く、私は何もコメントできませんでした。映画全篇には単純に歌や楽曲を散りばめて、この集合的記憶の全体像を再構築していきました。第一部「父たち」では、ダフマン・エル・ハラーシの詞が、祖国を離れた父たちの苦しみと屈辱を代弁しています。第二部「母たち」では、根こぎにされた女たちは故郷の言葉を使いませんでした。彼女らは、自分たちが思い入れできるイディールやエンリコ・マシアスの歌を、フランスのラジオを通して発見したのです。第三部「子どもたち」で流れるのは、ラシッド・タハ、シェブ・ハスニ、シェブ・マミです。これらライの歌が、移民の子どもたちの抗議と権利要求の叫びを激しくしているのです²⁰。

第二部「母たち」からの選曲が圧倒的に多い。ベンギギ自身の思い入れとも読める。つまり、自身の母も含め、マグレブ移民の女性第一世代がいかに異郷で暮らし、故郷を懐かしんだかを、映画撮影を通して初めて知ったのだ。

²⁰ *Mémoires d'immigrés* [CD]1998.

第一部「父たち」のダフマン・エル・ハラシーやスリマン・アゼムの曲は、アルジェリア以上に在仏アルジェリア移民社会の「古典的」愛唱歌である。エル・ハラシーは1940年末に渡仏し、以降リール、マルセイユ、パリのカフェやキャバレーで歌った在仏の歌手であった。アルジェリアで歌ったのは、1974年のコンサートが初めてである。スリマン・アゼムもまた、1937年に労働者として渡仏しフランスで歌い、FLNと対立したゆえ、フランスメインで活躍した歌手だった。なかでも、エル・ハラシーの「国を離れる者よ」Ya rayahは1973年、マグレブ（特にアルジェリア）からの移民の波が最高潮に達した時期のマグレブ移民の心の歌であり、1993年、移民の子であるラシッド・タハが親世代に敬意を表してカバーして世界的なヒットとなった。タハのカバー曲は、有名デザイナーのショーで使われるなど、ファッショナブルなかたちで「再発見」された。また、第三部「子どもたち」で多用されるアルジェリアの歌謡曲「ライ」は、80年代、90年代、ワールドミュージックの流行に乗って、既にフランス社会に認知され流布した楽曲で、アルジェリア移民第二世代のシンボリックなメロディーになった。1998年9月、パリ、ベルシーでアルジェリア出自をもつ三人の歌手、ハーレド、ラシッド・タハ、フォーデルが歌ったコンサート『アン、ドゥー、トロワ、ソレイユ』は、ライがフランス社会で存在を示した最高時の催しだった²¹。

これら第二世代の音楽シーンへの登場は、とりわけタハのカバーアルバム『詩集』^{ディーワン}*Diwan* (1998年)——上述の「国を離れる者よ」を含んでいる——が、父たちの愛唱歌を世間に知らしめたことで、当時の父たちの暮らしぶりをあぶり出しもした。第一世代の父たちは、組立ライン作業と三交代制の環境のなか、同じ労働者仲間の男たちだけで、兵舎や家畜小屋のような部屋で暮らしていた。過酷で非人間的な毎日のなかで、同郷者の集まるカフェや食堂に行くのが数少ない休日の楽しみの一つだっただろう。故郷の訛りで雑談し、カードやドミノをする。SPレコードから流れる歌を聴いて「祖国を離れた父たちの苦しみと屈辱」²²を分かち合う。時代の流れとともに、音源はLPレコード、ラジオからテレビに変われど、男たちには集まる場所があった。仕事場での同郷の仲間もいた。これは、後から合流する妻たちとは大きく異なる点である。同郷者が集まるカフェは、アルジェリア戦争中は祖国独立のための秘密の集会所にもなった。アルジェリア人経営のカフェは警察に厳しく監視され、ラジオ、SPレコードのアラビア語、カビリー

²¹ フランスで開催されたサッカーワールドカップでフランスが優勝した年であることを再記しておく。

²² *Mémoires d'immigrés* [CD]1998.

語の曲も検閲下にあった²³。

3. 母たちのマシラス、イディール

ベンギギが移民第一世代の父や母たちにインタビューし、彼ら彼女らが聴いた歌の話題で一番の驚きと発見は、母たちがフランスで聴いた歌ではなかったろうか。移民労働者として彼女らの夫たちや、第二世代の子どもたちがメディアで話題になるなか、家庭内にとどまっていた妻たち、母たちは、いわばフランス社会の影の部分で暮らしてきた。彼女らがフランスでどう暮らしたか、祖国をいかなるまなざしで見て、いかなる手段でつながっていたか、ベンギギとそのチームはインタビューを通して初めて知ったのだ。CD ジャケットコメントで「[渡仏してきたマグレブの母たち] は、自分たちが思い入れできるイディールやエンリコ・マシラスの歌を、フランスのラジオを通して発見した」ことを強調している。まず、60年代のマシラスも70年代のイディールもフランスで流行った歌手であること、そして、女性たちがラジオを情報収集の手段としていたことは予期せぬ事実であり、ベンギギを強く印象づけたはずだ。

映画の第二部「母たち」で流れる望郷の歌は、ダリダに象徴されつつも、エンリコ・マシラスが5曲と圧倒的に多い。マシラス歌謡のメロディーは、いわゆるシャンソン風で、父世代が愛聴したアルジェリア風アラブ歌謡とは別世界の音楽である（たとえばマシラスがアルジェリアにちなんだ「国を離れる者よ」Ya rayah やシャアビをカバーしたとしても）。マシラスはアルジェリア、コンスタンチヌ生まれのベルベル系ユダヤ人で、アルジェリア独立直前1961年にフランスに移住した。独立に伴って同様にアルジェリアを引揚げたヨーロッパ系植民者の数は100万とも言われている。マシラスは故郷喪失感を歌にのせ、自分にとって異国であるフランスでヒットを飛ばす。たとえば1965年「ぼくの故郷の娘たち」Les filles de mon pays を聴くマグレブの母たちは、自分たちのことを歌っていると感激したという。彼女たちは「ロミカール・マシラス」とか「モリコ・マシラス」と間違った名前を連呼してはばからない²⁴。1962年「故国よさらば」Adieu, mon pays、1966年「いや、ぼくは忘れなかった」Non, je n'ai pas oublié、同年「わが祖国」Ma patrie など、自分たちとは立場が対立するアルジェリア出身フランス人、ピエ・

²³ タハのアルバム『詩集』には、FLNに協力したため逮捕、投獄されたアクリ・ヤフヤテンが1959年に獄中から書いた曲「流刑」El Menfi も収録されている。

²⁴ Benguigui 1997 [texte], 113.

ノワールの望郷の歌に涙したのだ。イスラエル支援に積極的なマシアスを知っているベンギギ世代には、母たちのマシアス愛はショッキングだっただろう。

一方、イディールはカビリー地方のベルベル語の歌手で、カビリーの子守唄を元にして作った1976年の「ア・ババ・イヌバ」A Vava inouva が、ラジオを通してアルジェリア、フランス始め世界的にヒットして、一躍脚光を浴びた。カビリー地方のベルベル文化を抑圧していたアルジェリア政府とは、微妙な対立・支援関係を形成する。また、エル・ハラーシの唸るようなダミ声とは対照的な、しっとり澄んだその声は、60年、70年代のフォークソングブームに乗って、これまでとは一線を画するアルジェリア歌謡を確立した²⁵。ベンギギは、「アルジェリアのサイモンとガーファンクル」と呼び、アルジェリア移民は元来カビリー出身が多いためだろうか、これこそ母たちの歌と、イディールを絶賛している²⁶。

IV. ラジオ

1. 『インシャーアッラー日曜日』とラジオ

母たちの世代がラジオに熱心に耳を傾けて、フランス発信の歌のなかに異郷に暮らす自分たちの拠り所を見つけていった点に、ベンギギは強く印象づけられたはずだ。ベンギギは作品間にそれぞれ反響しあう主題や題材を入れ、作品間にネットワークが形成されると上述した。『移民の記憶』は、ドキュメンタリーの手法が前作『イスラームの女たち』の延長上にあり、マグレブ女性たちの移民体験という主題が次作ドラマ『インシャーアッラー』に引き継がれている。ドキュメンタリー『移民の記憶』の母たちのフランス移住体験の聴き取りが、ドラマ『インシャーアッラー』を撮らせたと言明できるが、前者と後者の「母たち」のあいだには微妙なタイムラグがある。

たとえば、『移民の記憶』の母たちは、多くが50年代、60年代、まだアルジェリア戦争中にフランスの地に来ているが、『インシャーアッラー』の母、ズイーナの移住は70年代のオイルショック後に設定されている²⁷。『インシャーアッラー』映画版、書籍版、

²⁵ Kaouah 2010, 189.

²⁶ 『インシャーアッラー日曜日』DVD 付録。

²⁷ 1974年、オイルショックによるフランスの景気悪化に伴い、ジスカールデスタン政権下の政府は新規移民労働者受入れを中止し、帰国を奨励するとともに既に国内で長く暮らす外国労働者の家族呼び寄せ、いわゆる家族統合政策を発表した。マグレブ諸国の男性労働者は不安定、不景気な母国へ戻る選択はせず、多くが家族呼び寄せの道を選んだ。一年か二年に一度、バカンス時に一ヶ月だけ再会する、それも親が決めた結婚をし、妻や生まれた子らと共に過ごす時間がほとんどな

いずれにも、物語の冒頭に、1974年からの移民受入中止と、家族を呼び寄せる家族統合政策の発令を明示し、フランスへのマグレブ移民が、男性単身の出稼ぎから家族単位の定住に大きく性格を変えたことを断っている²⁸。ベンギギはドラマ『インシャーアッラー』で、1954年に夫と北仏にやって来た自分の母や50年、60年代に渡仏した母たちよりも、時代設定として、マグレブの母たちが大量に押し寄せた70年代半ばを選んだ²⁹。既に見たとおり、音楽的にはエンリコ・マシアスよりもイディールが流行った時代だった。また、この世代はベンギギから見て、自分の母世代というより、自分とほぼ同世代になる。主人公ズイーナは、もし自分がアルジェリアで生まれて、そこで結婚し、夫がフランスに渡ったらという、ありえたかもしれない自分を物語ってもいる。

フランスに渡ったマグレブの母たちは、イディールらの曲をどこでどのように聴いたのか。『インシャーアッラー』の重要な小道具にラジオがあげられる。自由に外出できず、家の窓から見える通りがズイーナにとってのフランスという全世界だった。そんななかで、主人公ズイーナが家事をするとき台所で熱心にラジオに耳を傾けるシーンが数多くある。義母からラジオを取り上げられるシーンもあるが、全篇を注意深く眺めると、台所のシーンでは、必ずと言っていいほどラジオが画面に入っている。読み書きを知らないズイーナたちマグレブ移民女性にとって、ラジオは娯楽であり情報を得る唯一の手段だった。もちろん、アラビア語、ベルベル語放送もあり³⁰、故郷のラジオ放送も入った

い、つまり夫婦はほとんど他人と変わらない、そういう家族の呼び寄せであった。

²⁸ Benguigui 2001, 7.

²⁹ カピリー系のベンギギ一家（「ベンギギ」は婚姻後の姓）は1954年に北仏、サン・カンタン（『インシャーアッラー』の舞台都市）に来た。母はこの時18歳だったと言う（Benguigui 2001 [DVD] 付録）。父はFLNと対立していたアルジェリア独立運動組織MLAの党员で、北仏地区のアルジェリア人組織統制の任にあった。独立するアルジェリア帰国を前提に、ベンギギとその5人の兄弟姉妹は、父の監督のもと、イスラームのしきたりと父の政治方針に則って育てられた。アルジェリア独立を目指す党派の抗争がフランス国内でも展開し、ベンギギの父は3年間フランスの刑務所に入れられ、二人の叔父はELNに殺害されている。一家はまさにその渦中を生きたわけだが、独立後、MLA党员だった父は、FLNが国を主導するアルジェリアに帰還できなかった。その後、母は父と離婚し子どもを育てた。母のフランスでの苦労について、自分たちの惨めな暮らしに関わるものから目を逸らしてきたがゆえ、20代、30代の母がどんな暮らしをしたか知らずにいた、とインタビューに答えている（Alexander 2002, Garrigos et Roberts 1999, Bouzet 2001）。

³⁰ フランス国営放送RTF (Radiodiffusion-Télévision Française 1949-1964。後にORTF: Office de Radiodiffusion Télévision Françaiseに。1974年12月31日に閉局し、France Télévision, Radio Franceに会社分割)は、1945年に毎日2時間のアラビア語放送を開始、翌年からは6時間放送し、1956年には14時間に増え、700万人（うち3分の2は中東、3分の1はマグレブ）のリスナーに向け、4つの言語セクションになった。つまり、1) 中東アラビア語、2) 北アフリカアラビア語、3) マグレブ俗語アラビア語、4) カピリー・ベルベル語。1957年2月1日からは、アルジェ、オラン、コンスタンチーン中継でアルジェリア向けに4時間の放送をしている。「Les émissions arabes

³¹。が、母たちのダリダもマシアスも、フランスのラジオを通して聴かれたのだ。これは映画制作にあたってベングギが第一作から身を以て実感した、渡仏当時の母たちの暮らしの注目すべき事実であろう。

2. 1970年代とフランスのラジオ

一般家庭のテレビ普及はカラーの時代に突入したとは言え、70年代は世界的にトランジスタラジオ全盛の時代だった。日本でも深夜放送を通じて若者が熱心にラジオに耳を傾け、カーペンターズはラジオからヒット曲が繰り出されるさまを1974年に「イエスタディ・ワンス・モア」で歌い、日本でも1980年、RCサクセッションが「トランジスタラジオ」をヒットさせた。クイーンは1984年、少々懐古的に「知らなくてはいけないことはすべてラジオから学んだ」と「レディオ・ガ・ガ」で歌っている。

『インシャーアッラー』ではズイーナとラジオの関わりがいくつかのエピソードを通して語られる。フランスでFM局を中心にラジオ局が自由化されるには、つまり、ある集団やコミュニティ向けに特化してラジオ放送が聞けるようになるには、ミッテランが政権を執る1981年まで待たなければならない。Radio Beur (Beur FMの前身。1981年11月開局)、Radio Soleil (1981年6月開局) などマグレブ出自者コミュニティに向けたFMラジオ局が次々に開局され、1982年のレイラ・セバールの小説のアルジェリア移民二世主人公、シェラザードは、自分の聴く10あまりのラジオ局の周波数を諳んじていた³²。それまでラジオは、国営ORTF (フランス放送協会) から分割再編されたRadio France (ラジオ・フランス) の独占メディアだった。テレビの民営化も、それに少し遅れて1987年であった³³。衛星放送が始まり、パラボナアンテナが団地の窓を飾り立てる

de la radio française », *Documents Nord-Africains*, n° 265 le 8 avril 1957. Hadj Miliani は、1972年、アラビア語ラジオ放送局 RADIO MONTE CARLO Moyen-Orient の誕生を指摘し、中東、湾岸、マグレブ地域のアラビア語圏で1500万人に愛聴されたという。1996年からRadio France Internationale グループに編入される (Miliani 2008, 97)。

³¹ 70年代後半のアルジェリア移民の母娘を主人公にしたレイラ・セバールの小説『ファティマ、辻公園のアルジェリア女たち』では、父親が家のラジオで、ラジオ・アルジェを聴いていることを描写している。母が聴いていたという記述はない (Sebbar 1981, 10)。

³² Sebbar 1982, 34.

³³ 民営化されても、アラビア語ベルベル語放映局はない。1977年1月から1987年まで、国営FR3チャンネルで毎日曜、朝10時30分から90分、アラビア語、トルコ語、ポルトガル語の移民向け情報・娯楽番組『モザイク』 *Mosaïque* が放映された。放送素材は殆ど、移民送り出し国からの提供だったと言う (ハーグリーヴス 1997, 290)。

光景は、80年代になってからである。

移民として工場で働く父たちの情報に比べて、マグレブの母たちに関するアーカイブは映像でも活字でも圧倒的に少ない。それは、女性は外に出ずに家を守り、社会と接点があまりなかったという伝統的習慣が大いに影響している。『移民の記憶』を撮る際、母たちのアーカイブ映像が少ないので、訪問した母たちの家に飾られた家族写真を多く撮影したと言う。父たちが音楽を享受するとき、ラジオの他に、同郷者経営のカフェ、食堂でレコードやスコピトーン³⁴、生演奏、コンサートで見たり聴いたりする機会もあった。スリマン・アゼンやダフマン・エル・ハラシはそういう歌手であった。

1967年11月、パリ、オランピア劇場のウム・クルスームの伝説的コンサートに、果たしてマグレブのお母さんたちは行くことができただろうか。観客はマグレブの男性が殆どだったそうだが³⁵。アラビア語のラジオ放送もあったので、コンサート録音放送なども女たちも楽しむことはできた。しかし、『インシャーアッラー』はラジオがいかに、家のなかで孤立するマグレブ移民女性の外とのつながりを作るツールになっているか、メッセージ性をこめて描いている。つまり、ラジオは彼女らにとって、フランス語を学びフランス社会を知るツールにもなった。『インシャーアッラー』をめぐる多くの論者が、移民女性とラジオの繋がり的重要性を指摘している³⁶。『インシャーアッラー』は、1970年代のフランスのラジオをめぐる物語にもなっている。

3. ズイーナとラジオ

1958年から France Inter で続いた長寿番組『千フランゲーム』³⁷ *Jeu des 1000 francs* は、アルジェリアでも知られた番組だが、現在でも『千ユーロゲーム』として月曜から金曜まで、毎日放送されている。ズイーナは番組の訪問だと勘違いし、セールスマンから掃除機を買ってしまう。更に興味深いシーンは、アニメーター、メニー・グレゴワール

³⁴ 1960年代末から70年代にかけてヨーロッパの飲食施設に見られた、ジュークボックスとビデオを組み合わせた、ミュージックビデオの先駆けのような器械。人気歌手の歌を手軽に楽しむ機会を提供し、中東やマグレブのアラブ圏歌手のものもあった。Scagnatti 2009 参照。

³⁵ 1967年11月13日と15日の二日間、第三次中東戦争（六日間戦争）敗北直後、パリ有数の劇場で行なわれたコンサート。「Oum Kalsoum, une reine d’Egypte à Paris」
https://www.lemonde.fr/m-actu/article/2016/07/29/oum-kalsoum-une-reine-d-egypte-a-paris_4976320_4497186.html#meter_toaster

³⁶ Chivoiu 2015, García Casado 2010, Kummer 2002.

³⁷ 2001年から「千ユーロゲーム」*Jeu des 1000 euros* に変更。地域を限定し、訪問形式でクイズを出す。正解したら賞金がもらえる。

ルによる人生相談番組『アロー、メニー』*Allô Méné* を、ズイーナも敵対する隣家のドンズ夫人も熱心に耳を傾ける場面である。このラジオ人生相談は 1967 年から 1982 年まで、RTL 局が週日 25 分、視聴者の電話相談にジャーナリストであり作家であるメニー・グレゴワールが応じ、1984 年からはテレビ放送に変わった人気番組であった。相談内容はかなり個人的、セクシャルな話題にもなり、70 年代半ば、ピルの登場、妊娠中絶を合法化したヴェイユ法成立にみられる女性の権利やセクシャリティの解放など、1968 年五月革命以降のフランス社会の劇的变化、とりわけフェミニズムへの覚醒を物語っている。

『アロー、メニー』も多くのマグレブの母たちが聴いていたのだろう。祖国の因習をそのままひきずって異国で暮らす彼女らは、どう聴いていたのか？ これから生きるべき社会の動向に興味津々で追いかけたか、それとも自分とは無関係なことと切り離れたか？あるいはベンギギは、彼女ら移民女性の生きる状況とフランス社会の関心の方向を対照的に対比させ、隔たりを示したかったのか？

ズイーナはまちがいなく、最初の反応を示すタイプの人間で、やっとのことで探り当てた同郷のアルジェリア女性宅に一人で乗り込んで（女性単独で見ず知らずの他人の家にあがることも規範破りだ）、いきなり「ラジオは聴く？メニー・グレゴワールは？フランスの女たちよ。彼女たちは話す。話すの。セクシャリティについて、恋愛について」と不器用に、あっけらかんと本題に入ってしまう。相手のマリカ——その家の中は 15 年間段ボールが積まれたまま。つまり帰国を前提と暮らしてきた——は「セクシャリティですって。恥知らず！」とズイーナを激しく拒絶しつつも動揺する。

映画の終り、マリカに拒絶されたズイーナは意気消沈し、知人の車の申し出を断り、通りかかったバスで帰宅する。男性乗客のいるバスに女性一人で乗ることもマグレブの習慣ではタブーだったとベンギギは語っている³⁸。ラジオを聴くこと——当時の移民女性の選択肢のないなかでの娯楽と情報源を、ズイーナは意図せずに、新しい社会へと自分を差し向ける積極的なメディアツールとしている。意図せずに——ラジオに限らず、フランス社会という「外」を知り、そこへ入り込む糸口を何とかみつけようという主人公の姿勢が、コミカルなタッチで肯定的に、というよりもむしろ、マグレブのお母さんの奮闘に敬意を表して描かれている。

最後にスクリーンに流れる音楽は、母世代が聞いたのではない、ベンギギお気に入り

³⁸ Alexander 2002.

と思われるスアード・マシの曲「語り部」Raoui (2001年)である。「語り部よ、お話をして。(……)『昔々あるところに』から始めて。私たちは誰でもそれぞれ、心の奥底に一つのお話をもっている」と歌われるのは、ベンギギの母たちやズイーナの語られなかったお話であった。移民二世の娘は、自分も聞いたであろう歌謡曲、そしてそれを発信した、現在では恐らく部屋の片隅に追いやられているであろうラジオにさりげなく眼差しを注いで、消えてしまう旋律の背後にある移民女性たちの隠れた物語をフィルムに記録した。

V. 結び

移民第一世代の母たるズイーナの1970年代は、奇しくもベンギギ自身の10代、20代、精神的成長期と重なる。母たちが明かした苦労話や思い出、彼女らの奮闘ぶりに、自分の青春模様をだぶらせているとは言えないだろうか。ダリダの「美しい、私のくによ」は、移民一世母たちの祖国を想う歌だが、ベンギギ自身も青春時代に聴いた歌だ。アルジェリア移民の娘としてフランスで育ち、教育を受け、1968年5月以降のフランスの政治的、精神的風潮のなかで成長した女性である。多くの母たちが海を渡った70年代は、ベンギギ自身にとっても移民第二世代の娘として、自己を模索していた時期でもあろう。「見えないヒロイン」³⁹ たる母たちの物語の背後に、表現者として自分の進むべき道を切り拓いていった自身の物語も隠れている。

祖国から根こそぎにされたマグレブの母の物語『インシャーアッラー』は、娘の物語でもある。ベンギギら移民第二世代の女性は、自分たちの居場所を獲得、確認するため、父たちよりさらに見えない、「記憶の非・場」にあったヒロインたちに光を当てることから始めた。「私たちは記憶のない世代でした。両親は名前も顔もない人の群れとして『よそ者』と呼ばれてきました。口を閉ざし黙って生きてきました。記憶をもたず自分の歴史を知らずにいると、歴史が分からなくなります。在仏マグレブ移民の記憶に光を当てることが私の緊急課題でした」⁴⁰ ——自分たちが生きるために映画を撮るアルジェリアにルーツをもつ娘は、母たちの欠落していた「歴史／物語」を拾い直すことから始めた。遠い祖国に眼差しを注ぐ母たちの空隙を埋めなければ、娘たちの生きる「これから」は拓けなかったのだ。

³⁹ Benguigui [DVD] 2001, 監督インタビュー。

⁴⁰ Benguigui 2017.

付記：2018年9月12日夜、本稿で何度も言及したラシッド・タハが心臓発作で急逝した。6日後には60歳の誕生日を迎える予定だった。これまでのかけがえのない音楽活動を讃え、冥福を祈りたい。

参考資料

ー ヤミナ・ベンギギ (Benguigui, Yamina) 主要作品一覧

映画 (DVD 情報を記載)

『イスラームの女たち』 *Femmes d'Islam*, MK2, 1994. (ドキュメンタリー 各 52 分の三部作：マリ、インドネシア、フランス、エジプト、アルジェリア諸国のムスリム女性の状況)

『移民の記憶 マグレブの遺産』 *Mémoires d'immigrés, l'héritage maghrébin*. MK2, 1997. (日本版；ヤミナ・ベンギギ『移民の記憶——マグレブの遺産——』発行パスレル、販売ビデオプラス) (ドキュメンタリー 各 52 分の三部作：マグレブからのフランスへの移民の歴史を父—母子の立場からたどる)

『芳しき庭』 *Le Jardin parfumé*, Zyllo, 2000. (ドキュメンタリー 52 分：アラブ—ムスリム社会におけるセクシャリティ)

『インシャーアッラー、日曜日』 *Inch'Allah dimanche*, Columbia Tristar, 2001. (フィクション 98 分：家族統合政策によって渡仏するアルジェリア女性の奮闘物語)

『ガラスの天井』 *Le Plafond de verre / Les défricheurs*, MK2, 2006. (ドキュメンタリー 55 分：移民出自の若者の就職差別)

『9-3 区域の記憶』 *9-3, mémoire d'un territoire*, Zyllo, 2008. (ドキュメンタリー 90 分：セヌー＝サン＝ドニ県、いわゆる荒れた郊外の歴史を 1850 年から現在までたどる)

『アイシャ』 *Aïcha* (4 épisodes), France 2, 2009-12. (シリーズテレビドラマ：パリ郊外ボビニーに住むアルジェリア移民二世の娘アイシャをめぐるコメディタッチのドラマ)

1. *Aïcha*, France Télévisions Distribution, 2009 (テレビドラマ 90 分：2009 年 5 月放映)

2. *Aïcha 2, Job à tout prix*, France Télévisions Distribution, 2011 (テレビドラマ 90 分：2011 年 3 月放映)

3. *Aïcha 3, La grande débrouille*, France Télévisions Distribution, 2011 (テレビドラマ 95 分：2011 年 9 月放映)

4. *Aïcha 4, Vacances infernales*, France Télévisions Distribution, 2012 (テレビドラマ 88 分：2012 年 6 月放映)

『メトロ、バス、RER』 *Métro, Bus, RER, etc... Histoires de vies en commun*, Zyllo, 2010. (ドキュメンタリー 52 分：パリとその近郊の交通手段—メトロ、バス、RER の利用者と運転手へのインタビュー。さまざまな人生と出会い)

書籍

Femmes d'Islam, Albin Michel, 1996.

Mémoires d'immigrés, l'héritage maghrébin, Canal + Editions, 1997.
Inch'Allah dimanche, Albin Michel, 2001.

- 引用文献・資料

Alexander, Livia (2002). « French-Algerian: A Story of Immigrants and Identity », Satia, May 2002 (web), <http://www.satyamag.com/may02/alexander.html> (2018年8月5日閲覧).

Belbahri, Abdelkader (2009). « Création musicale, héritages et expressions culturelles des jeunes issus de l'immigration dans l'agglomération lyonnaise ». *Ecarts d'identité* n° 114, 70-74.

Benguigui, Yamina (2017). « De Benguigui » message de l'auteur adressé au public japonais, le 20 juin.

Bouzet, Ange-Dominique (2001). « Sur la vie de ma mère » *Libération*, le 5 décembre (web).

ベンギギ、ヤミナ (Benguigui, Yamina) (2006). 『『移民の記憶』——マグレブ移民のルーツをたどって』(インタビュー) 菊池恵介、『前夜』9号、2006年秋、26-42.

Chivoiu, Oana (2015). « Displaced mothers, veils in motion, and fatherlands in Yamina Benguigui's *Inch'Allah dimanche* », *Etudes francophones*, n°s 1-2, vol. 28, 56-72.

Cité nationale de l'histoire de l'immigration, « Musique et musiciens d'Algérie (XIXe-XXe siècles) : destins croisés » (Fiche pédagogique intermusées), http://www.histoire-immigration.fr/sites/default/files/musee-numerique/documents/fichemahj_cnhi_musique.pdf. (2018年8月5日閲覧).

Daoudi, Bouziane et Hadj Miliani (1997). *L'Aventure du raï*, Seuil (coll.Points virgule).

—— (2002). *Beur's mélodies. Cent ans de chansons immigrées du blues berbère au rap beur*. Séguier.

Derderian, Richard (2009). « Quand la deuxième génération entre en scène » in El Yazami et al, 2009, 294-300.

Ecart d'identité (2009). numéro spécial : La chanson maghrébine de l'exil en France, juillet.

El Yazami, Driss (2009). « Paris, scène maghrébine » in El Yazami et al, 2009, 134-139.

El Yazami, Driss. et al. (dir.) (2009). *Génération. Un siècle d'histoire culturelles des maghrébins en France*. Gallimard.

Garcia Casado, Margarita (2010). « Affirmation de soi et sororité dans *Inch'Allah dimanche* de Yamina Benguigui », *Afroeuropa* 4-2 (web).

<https://repositorio.unican.es/xmlui/bitstream/handle/10902/4443/Garc%C3%ADa%20Casado%2C%20Margarita%202010.pdf?sequence=1&isAllowed=y> (2018年8月5日閲覧).

Garrigos, Raphaël et Isabelle Roberts (1999). « Yamina Benguigui, 41 ans. La réalisatrice de «Mémoires d'immigrés» est devenue la présentatrice-alibi de «Place de la République». Algérie de me voir si belle" » *Libération*, le 2 septembre, (web).

Gaulier, Armelle (2015). « Chanson de France, chansons de l'immigration maghrébine : Étude de l'album *Origines contrôlées* » *Afrique contemporaine*, n° 254, 73-87.

ハーグリーヴス、アリック.G. (Hargreaves, Alec G.) (1997). 『現代フランス、移民からみた世界』(石井伸一訳)、明石書店 (*Immigration, 'race' and ethnicity in contemporary France*, Routledge,

- 1995)
- Humblot, Catherine (1999a). « Mémoires d'immigrés » *Le Monde*, le 28 mars.
- (1999b). « La télé monochrome en question » *Le Monde*, le 17 octobre.
- (2002). « Il y a un réel besoin d'une mémoire de l'immigration » *Le Monde*, le 6 janvier.
- (2003). « La télé n'est toujours pas multicolore » *Le Monde*, le 27 septembre.
- 石川清子 (Ishikawa, Kiyoko) (2017). 「ヤミナ・ベンギギの映像作品とテキスト——フランスにおけるマグレブ移民の母たちと娘たち」『静岡文化芸術大学研究紀要』16号、1-8.
- Kaouah, Abdelmadjid (2010). « Vers la sublimation des formes , Arts et art de vivre » in *Arabes en/de France*. Nouvelles éditions Loubatières, 2010.
- Kummer, Ida (2002). « Colonisée, maghrébine, beurette: le parcours de la combattante », *CELAAN*, 1-2, 49-55.
- McMurray, David A (1997). « La France arabe » dans Alec G. Hargreaves et Mark McKinney (éd.), *Post-colonial cultures in France*, Routledge, 26-39.
- Mémoires d'immigrés. L'héritage maghrébin. Bande originale du film* (1998). (CD) Bandits.
- Miliani, Hadj (2008). « Présence des musiques arabes en France : immigrations, diasporas et musiques du monde ». *Migrance* 32, 91-99.
- Mogniss H., Abdallah (2008). « Paroles et chansons de l'immigration (maghrébine) » *Vacarme* 44, été, 52-55.
- Mokhtari, Racid (1999). *La Chanson de l'exil : les voix natales (1939-1969)*, Casbah.
- Noiriel, Gérard [1988] (2007). *Le creuset français: Histoire de l'immigration XIXe-XXe siècles*. Editions du Seuil. (ジェラルール・ノワリエル『フランスという坩堝：一九世紀から二〇世紀の移民史』(大中一彌、川崎亜紀子他訳)、法政大学出版、2015年)
- Scagnetti, Jean-Charles (2009). « Il était une fois les scopitones … » in El Yazami et al, 2009, 238-241.
- Sebbar, Leïla. *Fatima, ou les Algériennes au square*, Stock, 1981.
- (1982). *Shérazade, 17ans, brune, frisée, les yeux verts*. Stock, 1982.
- Taha, Rachid (1998). *Diwân*. (CD), Barclay.
- Taha, Rachid et Dominique Lacout (2008). *Rock la Casbah*. Flammarion.
- Yahi, Naïma (2009). « Les femmes connaissent la chanson » in El Yazami et al, 2009, 140-145.